

## 地域再生への挑戦

島根県隠岐郡海士町<sup>あま</sup>

研究員 一瀬裕一郎

### 1 はじめに

本稿では、離島という不利な条件ながらも、地域再生に取り組んでいる島根県隠岐郡海士町の取組みについて紹介したい。

### 2 財政悪化を乗り切れ

鳥取県境港からフェリーで3時間。島根県沖60kmに浮かぶ中ノ島に海士町はある。後鳥羽上皇の流刑地として、また小泉八雲の逗留先として有名である。

終戦直後に7,000人を超えた人口は現在2,500人まで減少し、少子高齢化が進んでいる。また、年間予算が30億円台の町で地方債残高は、ピーク時の01年度には100億円を超えた。過疎化と財政悪化が進み、座視すれば地域社会が消滅しかねない状況だった。

02年に就任した山内道雄町長は、町財政を再建するべく、行財政改革に着手した。職員数の削減と、議員報酬・職員給与のカットを断行した。町長自身の報酬カット率は50%に達した。はじめに自らの身を削る行政をみて、町民も老人クラブの補助金返上やバス料金の値上げを申し出るなど、自発的に財政再建に協力した。官民一丸となった取組みが功を奏し、04年度には4億円へと落ち込んだ財政調整基金(町の貯金に相当)残高が、08年度には9億円台に回復した。

町は経費削減により捻出した資金を財源として、将来の人口維持のために少子化対策を実施している。妊婦に対しては島外への通院費用を補助し、子どもの生まれた世帯に対しては出産祝い金を支給してきた。単なる緊縮財政を敷くのではなく、必要な分野には戦略的に支出を惜しまないメリハリの効いた財政運営であるといえよう。

### 3 島外へ売り込め

海士町では日本海の荒波に育まれた生きの良い魚介類が豊富に水揚げされる。しかし、離島という地理条件ゆえに鮮度維持と運賃負担が障害となり、本土へ出荷しても漁業者の手取り増大に必ずしも結びつかないという問題があった。何とかして豊かな海の幸を新鮮なまま本土へ売り込めないか。辿り着いた答えがCAS(Cells Alive System)凍結の導入だった。

CAS凍結とは、細胞を破壊せず、生鮮の風味を損なうことなく冷凍できる画期的な技術である。海士町が出資する第三セクター(株)ふるさと海士では、高級食材として高値で取引される白イカや、春先に旬を迎える岩牡蠣を地元の漁業者から買い入れている。それらをCAS凍結することで、旬以外の時期にも販売が可能となり、首都圏の飲食店などへ販路が拡大している。(株)ふるさと海士は、食品加工を通じて地域に雇用を創出するだけでなく、運賃などの経費がかからない出荷先として漁業者の手取り増大にも貢献している。

海士町が売り出しているものは、CAS凍結



岩牡蠣

した海産物だけに留まらない。「島まるごとブランド化」を掲げ、島にある資源を生かした商品の開発に取り組んでいる。地域の家庭料理をベースにJA隠岐どうぜん女性部が開発した「島じゃ常識 さざえカレー」や、日本名水百選の「天川の水」が注ぐ清浄海域の海水を天日で乾燥させて作った「隠岐国・海士乃塩」などを売り出してきた。

それら数ある商品の中で、とりわけ稀少なのが「隠岐牛」である。元来、海士町では広く存在する入会牧野で和牛繁殖経営が営まれ、子牛を本土の家畜商へと販売してきた。しかし、子牛の値段が本土の他地域に比べて低く、本土並みの収入を確保するのが難しいという問題があった。そこで(有)潮風ファームが04年に和牛一貫経営へ参入し、06年から「隠岐牛」ブランドで首都圏へ向けて販売を開始した。(有)隠岐潮風ファームは、公共事業の減少を受けて、異業種参入を決意した地元の建設業者により、特区制度を利用して設立されたものである。たゆまない肉質向上への努力が結実し、最近では食肉市場で高級品とされる割合が8割を越え、他の銘柄牛に比肩する評価を勝ち得ている。

このように海士町では、財政健全化という「守り」と、産業振興という「攻め」の両面から、地域再生に取り組んでいるのである。

#### 4 島外から人を呼び込め

地域再生を行うには多様な能力を持つ人材が欠かせない。しかし、島に暮らす人材は限られている。そこで、海士町では島外の人材を活用しようと、島外との交流に積極的に取り組んできた。

第1に、Iターン者の受入れである。Iターン者を受け入れるには快適な生活環境を整えることが必要であるとの考えから、Iターン者専用住宅を建設したり、子弟の教育に対する不安を払拭するために公教育の充実を図ったりしている。Iターン者に対して手厚い



隠岐潮風ファームの和牛

取組みが奏功し、海士町の保育園の園児に対するIターン者子弟の割合は1/3を占めるまでになっている。

第2に、一橋大学などの大学生との交流である。この交流では、地域づくりなどを学んでいる学生に海士町の暮らしを体験してもらうだけに留まらない。一橋大学との交流では、海士中学校の修学旅行の中で生徒が国立市の大学キャンパスを訪れ、海士町の様子について大学生や地域住民に対して講義を行うなど、双方向の交流となっている。このような大学生との交流は、海士町の小中学生にとって視野を広げる刺激となっている。

#### 5 おわりに

以上でみたように、海士町では行政と町民が危機感を共有して、財政再建に向けそれぞれができることを一つずつ実行してきた。また、島の資源を商品化して島外へと販売するために、工夫を凝らした様々な取組みを行っている。それらの取組みによって、海士町は地域再生に向けた歩みを着実に進めている。

<参考文献>

・山内道雄(2007)『離島発 生き残るための10の戦略』NHK出版

(いちのせ ゆういちろう)